

**頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム  
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—  
報告書**

**アジア・アフリカにおける持続型基盤の発展に寄与する  
ものづくり研究の可能性**

派遣者：金子 守恵

派遣期間：2013年10月29日～2014年3月21日

派遣先：アジスアベバ大学南オモ研究所（エチオピア連邦民主共和国）

キーワード：地域博物館、「もの」の収集、「物語」の収集、日用品、生業技術

**1. 研究課題について（400字程度）**

アジア、アフリカに暮らす人びとは、地域の自然環境、コミュニティ内の社会関係、さらには外部との交流にあわせて、日々の生活に必要なもの（＝日用品）をつくりだしてきた。この研究では、ローカルな技術的实践とグローバルな環境変化や社会的な制度が交差する場としてのものをつくる身体（技法）に注目し、コミュニティにおける知（＝在来知）の共有と配分の過程を描き出すことによって、アジア・アフリカにおける持続型生存基盤の発展に寄与することをめざす。具体的には、①調査研究、②共同研究／協働、③研究発信の3点に留意して研究課題を遂行する。今年度は、①エンセーテの生産や消費、交換に関わる知や技法についての調査研究、②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究、そして③国際ワークショップや派遣先機関でのセミナーや講演会での発表を中心に研究発信をおこなう。

**2. 派遣の内容（400字程度）**

今回の渡航は、①～③のすべての課題に関わる調査活動に従事した。(a) 11月1日～3日にかけて、アジスアベバ大学エチオピア研究所と在来知研究会が共催した博物館に関する第1回国際会議に参加発表した。その後、(b) JICA、OVOP (One Village One Product) プロジェクトの活動地であるゲタ郡（エチオピア西部）において、コミュニティを基盤にした農産物の生産と加工に関わる活動について広域調査をおこなった。(c) 11月中旬～下旬には、SORC において今後の展示についてのディスカッションをおこなった。(d) 12月初旬には南スーダンにおいて、紛争後社会における日常生活の回復としての生業活動に関わる知の実践についての広域調査をおこなった。(e) 12月下旬～3月中旬まで、SORCの物質文化の収集のサポートをおこなったほか、標高2000m以上の地域で生業活動に関わる技術についての調査をおこなった。

**3. 派遣中の印象に残った経験や体験（800字程度）**

上記(a)の博物館に関する国際会議 (Past Experience, Current Status and Future trends: First International Conference of the Museum of the Institute of Ethiopian Studies) エチオピア研究所の民族博物館の保全や修復に関する報告のほか、エチオピア国内にあるコミュニティ博物館に関わる報告もあり、私が現在取り組んでいる調査研究や活動に直接的に関連するもので、たいへん興味ぶかかった。また、これまで博物館の裏方で仕事をされてきたスタッフと知り合いになることができたこともたいへん意味ぶかいことであった。

(c) では、SORC における第 2 回特別展に関する打ち合わせを、Merkab 所長とともにこない、(e) でそれに関連する物質文化の収集を所長とともにこなった。「ものの社会生活」という視点に留意して収集をおこなった。(d) では、南スーダンのジュバ大学で開催される国際会議 (Peacebuilding and 'African Potentials') への参加をすると同時に、ジュバ周辺地域をめぐって紛争後社会における日常生活の回復としての日用品の製作に関わる広域調査をおこなった。エチオピアの隣国ではあるが、内戦という経験だけではなく、自然環境や文化社会的に異なる点が非常に多く、エチオピアでこれまで経験してきたことを、さまざまな点から相対化することができたと考えている。

この経験は、エチオピア西南部地域において都市計画化をうけいれたために、畑などすべて伐採されてしまった人びとへの聞き取りの際の参照点になると考えている。この地域以外に、標高 2000m の地域で、在来植物エンセーテを基盤とした農業における生業技術の伝承と創造にかかわる調査をおこなった。昨年度は雨季に同じ地域で同様の調査をおこなったので、今回は乾季に同様の調査をおこない、年間をとおした傾向性を把握するためのデータを入手できた。

#### 4. 目的の達成度や反省点 (400 字程度)

この研究期間も半分がすぎ、来年最終年度にむけて①～③の課題に関する達成度について一定の目処がつきはじめてきたと考えている。①については、工芸品などのものづくりばかりではなく、在来植物エンセーテを基盤とした生業活動に関わる技術についての調査研究をすすめることができ、ものづくりの対象を拡張したという点でほぼ予定どおり達成できたと考えている。工芸品と生業活動における技術というふたつの異なる在来知の継承と配分をいかに統合して、持続型基盤の発展に寄与するかについてはあまり十分に考察をすすめられていないのが反省点である。②については、SORC&M の所長とともに、第 2 回目の特別展の展示について打ち合わせをすすめ、そのアイデアを「もの」と「物語」の収集にまでつなげることができた点で、これもほぼ予定どおり達成できたと考えている。ただし、具体的な展示方法については、来年度により具体的につめていくことになったのが課題につながる反省点である。③については、来年度、京都で開催される国際シンポへの招聘者を検討するうえで非常に意義深いものであり、その点において予定どおり達成できたといえる。

#### 5. 今後の派遣における課題と目標 (400 字程度)

今回の派遣は、今年度の派遣を締めくくるものであったと考えている。これらの成果を今後の派遣につなげるためには、いくつかの課題も見いだされた。①については、本調査はほとんど終了したので、今後はこれらのデータをもとに、工芸品と生業活動における技術というふたつの異なる在来知の継承と配分をいかに統合して、持続型基盤の発展に寄与するかといった点について考察をすすめる必要がある。これについては、②や③の課題とも関わっていると考えている。②は、今後の派遣において第 2 回目の特別展示を SORC&M の所長と連携して実施することを予定している。また、これらの活動が最終年度の京都での国際シンポにいかにして反映できるかも課題のひとつである。③については、①でもふれたふたつの異なる在来知の継承と配分について、考察をすすめるために、国際民族生物学会へ参加発表する予定で準備をすすめている (受理済)。



写真1 First International Conference of the Museum of the Institute of Ethiopian Studies。  
京大博物館の大野館長が発表している様子。



写真2 南部スーダンにて。男性が穀倉庫の一部を製作する様子



写真3 アジスアベバ大学南オモ研究所&博物館の所長とともに遊牧民の物質文化を収集